

# 協同の系譜

①

## 第1部 川崎 平右衛門

### 尊徳以前

# 源流100年さかのぼる

時は江戸時代の中頃。武蔵野新田開発に伴う井戸掘り普請に駆り出された百姓たちに木札が配られた。仁の札は歛(くわ)を取りをする男に。義の札はもっこを持つ女に。礼の札はざるなどで物を運ぶ女子供に。智の札は子守りをする女子供に。信の札は子守りをされる小児に。

### 地域おこしで功績

そして、声が響き渡る。仁の札を持つ者には麦3升、義の札を持つ者には麦2升、礼の札を持つ者には麦1升5合、智の札を持つ者には麦1升、信の札を持つ者には麦5合を配る。いかに、力ある者は力を出せ。知恵があるものは知恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ。沸き返る百姓たち。

平右衛門は江戸時代中期、享保の改革の一つとして着手された武蔵野新田開発を成功に導いた。その後、美濃三川の治水工事、さらに石見銀山の再興に当たった。武蔵国多摩郡押立村(現府中市)出身の名主であったが、その現場での仕事ぶりに目をとめた幕府に取り立てられ、新田世話役、支配勘定格を経て代官にまで登用された。

全国を股に掛けて、国家プロジェクトともいえる重要工事を担った。行った先々には、その功績と人徳をたたえる謝恩塔や供養塔などが設けられている。

平右衛門は土木・治水の専門官僚という面を持ちながらも、インフラ開発にとどまらず地域

世話役の川崎平右衛門である。世話役の川崎平右衛門である。おこし、人心一体となつての地域振興に取り組み、大きな成果を生んできた。その仕法の中心は、人が持つ力を引き出し、それを組み合わせることによつて、地域の振興を図っていくものであり、まさに協同を基本とした。

農的社会デザイナー研究所代表 葛谷 栄一

### 市民発案で舞台化

その川崎平右衛門を知る人は少ない。筆者も2014年に合

**筆者略歴**  
つたや・えいいち 農林中央金庫勤務を経て農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事。2013年11月から現職。1948年生まれ、宮城県出身。

つたや・えいいち 農林中央金庫勤務を経て農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事。2013年11月から現職。1948年生まれ、宮城県出身。

唱構成劇「武蔵野の歌が聞こえる」の公演に關係してからだ。そもそも平右衛門をテーマに劇をつくる話は小金井市民の発案による。武蔵野新田開発の拠点となる陣屋の一つが、今の小金井市にあったことが背景にある。小金井市民と現代座代表の木村快さんが一緒になり、4年にわたって勉強会を積み重ね、その上で木村代表が脚本を書き上げた。並行して市民で公演のための実行委員会を結成し、その



川崎平右衛門の肖像画 (府中市郷土の森博物館所蔵)

今回を含めて6回にわたり川崎平右衛門を紹介していく。平右衛門は元禄7(1694)年の生まれで、活躍したのは1750年前後。日本の協同組合の祖、源流とされる二宮尊徳の約100年前である。源流はさらにさかのぼるとみることもできよう。

◆ 新企画「協同の系譜」は、協同組合の源流をくむ先人の生き方や事績をたどります。(次回は13日付)

協同の系譜

②

第1部

川崎 平右衛門

白羽の矢

苦境の新田開発再興

日本における協同組合の祖・源流といえ、二宮尊徳や大原幽学が挙げられるが、川崎平右衛門定孝は時代をさらに約100年さかのぼる。

元禄7(1694)年3月15日に武蔵国多摩郡押立村(現府中市)で川崎家7代目安信の長男として生まれた。川崎家は北條氏に仕えていたが、豊臣秀吉の小田原城攻めを受けて、刀を捨てて武蔵国に下って百姓となり、代々名主を務めた。

平右衛門は幼い時から学問を好み、江戸に足を運んで、著名な漢学者である河村瑞軒や伊藤仁斎にも師事したとされる。百姓、農民とはいえ、相当な学識を身に着けていたとみられる。

平右衛門は幼い時から学問を好み、江戸に足を運んで、著名な漢学者である河村瑞軒や伊藤仁斎にも師事したとされる。百姓、農民とはいえ、相当な学識を身に着けていたとみられる。

農的デザイン研究所代表 葛谷 栄一

平右衛門が生まれたのは元禄という、まさに経済の爛熟(らんじゅく)期であり、財政逼迫(ひっぴやく)に伴って経済が停滞する下り坂の時代に育った。そして元禄地震、宝永地震、富士山噴火という大災害の時代でもあった。1703年の元禄地震はマグニチュード8・2、1707年の宝永地震はマグニチュード8・6と、東日本大震災に匹敵する大地震で、宝永地震の49日後には富士山が噴火して大災害を巻き起こしている。

こうした時代状況を踏まえて平右衛門22歳の時、8代將軍に紀州藩主の徳川吉宗が就き、享保の改革を断行する。これは倭約と増税による財政再建を目指すものであった。財政の安定化のために年貢を強化して5公5民に引き上げ、これまでの検見法に代えて豊凶にかかわらず一定の額を徴収する定免法を採用した。

その一方で新田開発による水田面積の拡大に取り組み、越後紫雲寺湯や淀川河口などと併せて、武蔵野での新田開発にも着手した。

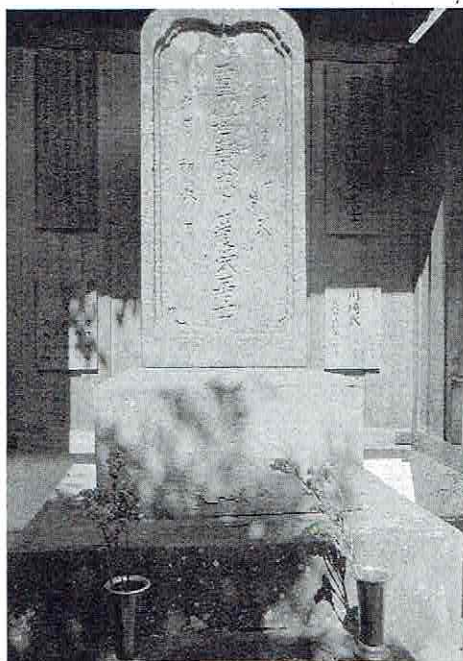
手した。ちなみに享保元(1716)年に開始した改革は、享保16(1733)年頃には財政は黒字基調に転換し、江戸城の奥金庫には新たに100万両の金が蓄えられたともいわれている。

その武蔵野新田の開発は、他の越後紫雲寺湯などの治水を中心とした新田開発とは異なり、水のない、スキヤカヤなどの茫々(ぼうぼう)とした草原が広がった所であった。1653年に開通した玉川上水からの分水に期待するか、井戸を掘りあてるしかない。利水の問題に飢

饉(ききん)が重なり、例えば入植した1320余戸のうち、どうか生活ができたのは35戸しかなかったと記録されるように、畑は開いたものの、男たちは江戸に日稼ぎに出て、女子どもと老人が残された。まともな耕作ができないだけでなく、食料が絶対的に不足して餓死者も出る始末であった。

こうした中、担当代官の上坂安左衛門が吉宗に直接呼び出されて問責され、上坂の上司であり責任者であった大岡越前守と相談して白羽の矢を立てたのが川崎平右衛門であった。平右衛門は新墾や殖産の業に詳しいだけでなく、近郊の窮民のために私財を投じて施与するなど篤農家として信望を集めていた。

上坂から懇請された平右衛門は、早速に自家の米倉、麦倉を開放して、小金井橋で炊き出しを行った。こうした一時的救済でのぎつつ、恒久的な救済策として新田経営の確立に取り組みことになる。(次回は20日付)



真蔵院にある川崎平右衛門の供養塔 (東京都小金井市で)